

# 日本語教育における「体系」とは

金 相郁

## 概要

近年日本語教育では、学習者主体の理念を中心に様々な形態の教室が設計され、従来までの日本語教育から抜け出し、新しい方向性を見出す傾向が多く見られる。本稿では、その変化の大きなポイントとなっていることを「何を」という「体系意識」と規定し、その「体系」とは何か、また、それは戦後日本語教育から現在に至るまでどのように取り扱われてきたのかについて考える。特に本稿では、筆者の日本語学習層において自ら感じたものを問題意識の中心にし、日本語文法、日本文化における「体系」を考察する。また、日本語教育全般における「体系」を教室活動でいかに捉えるのかについて考察することにより、「体系」を取り直すことが本稿の所在である。

## キーワード

日本語教育、日本語文法、日本文化、何を、体系、自立的な思考

## 1 はじめに（問題意識）

大学時代、筆者の日本語学習の目的はイメージとして「日本語文法、日本の文化（経済・政治・生活様式など）を熟知していれば、日本では不自由なく暮らせる」ということだった。実に教室とカリキュラムはそのような願望に応じて日本語文法や日本文化についてのクラスが大半を占めていた。教室の運用は、例えば、文法のクラスでは多数の文法項目を擬似の場面の中で数回のドリルで習得し、日本文化関連クラスでは日本のある事実を必死で暗記するための教師からの講義が圧倒的であった。その当時、筆者の意識は、教室活動に順応し、言われる文法知識や文化事実を無自覚的に受け入れた。しかし、その無自覚的であったのが、意識的になり違和感を覚えたのは日本で留学生生活をスタートした頃だった。

最初、日本に来たときは生活や勉強など様々な困難に遭遇する日々の連続であつて、特に生活というのは、何をするにも誰かが傍に付き添ってくれないと不安だったし、日本人との人間関係作りの場面ではどのようなコミュニケーションをとればいいのかについてもかなりの迷いがあったことを思い出す。しかし、その当時の自分には毎日付き添ってくれる人当然いなかったし、人間関係も結局自分かどうにかして形成していかなければならなかった。そのような迷いの挙句考えたのは「とりあえずぶつけてみよう」という姿勢、心構えだった。たとえば、銀行で口座を開く時には、案内人らしき人に「あの・・・口座・・・」といったたどたどしい日本語で声をかけると、相手は親切に段取りを教えてくれる。また、道に迷った時には、見知らぬ人に「あのXXに行きたいですけど」といえば、大体は教えてくれる。筆者はこのようにだんだん日本の生活になれていたのである。無論、ここで取り上げた場面以外、筆者が遭遇した場面は数多くあるが、大体以上のような行動がベースになっていた。

つまり、ここで言えることは日本という社会で生きていくためには武器、手段として言葉というツールを自分のものとして持つことができれば、自分を取り囲んでいるのは自分乗り越えていけることである。言い換えれば、その取り囲んでいるものへの認識は他でもない「私」の認識の範疇の中で繰り上げられるものになることである。よって、言語教育において学習者を画一化してしまう習得のパターン、ある社会のコミュニケーションルール(体系)だけを身につけさせる(ネウストプニー 1982, 1995, 名倉2005)つまり、「何を」という体系を刷り込む教育形態に問題意識を感じたのである。本稿では、この筆者の問題意識を軸に、現在までの日本語教育で「体系」はいかなるものとしてとられてきたのかを考察し、これから向かうべき方向について筆者の見地を述べる。

## 2 日本語教育における体系の存在

近年、日本語教育のパラダイム転換の風潮の中、日本語教育では様々な動きが見られる。たとえば、文法・文型、文化、コミュニケーションといった、人間が言語生活を営んでいく上で欠かせない諸要素についての根本的な議論や、それらは言語教育において如何なるものなのかなど、従来の日本語教育界では考えてこなかった問題が挙げられる。ここでは、学習者が日本語学習を始めるに当たって教室の中で

重要な役割を果たす「文法・文型」という言語的な側面についての体系といわゆる文化の体系について考察する。

## 2. 1 戦後日本語教育全般における体系

1960年代から現在までに、戦後の日本語教育大きく三つの流れの中に位置づく。60年代から70年代（教育内容中心）、80年代（教育方法中心）、特に90年代からは「なぜ」という項目に注目するいわゆる日本語文化教育学（日本語運用による問題解決能力開発）への関心シフトが目立つようになった。それは言語教育と文化教育の統合を目指す（細川2006：127）考え方である。では、なぜこのように80年代までの日本語教育から「なぜ」を問う日本語文化教育（以下、言語文化教育）に関心がシフトしたのか。この問いに対する答えは、60年代から80年代まで教室内で設定されていた教育目標（教育内容、方法中心）の欠点にあるのではないかと考えられる。教育内容を「何を」、方法を「どのように」にとするならば、教室内で行われる活動というのは動かない固定化している知識を学習者に与えること、そして効果的に与えられるよう教師側が振舞うといったことに問題が潜んでいたことである。80年代には学習者中心という概念が提唱され、教育内容中心が批判的に捉えられたが、結局、そこでの「何を」はまったく変わることはなかった。さらに問題になるのは「何を」が決まらなければ、「どのように」も変わらないことである。つまり、決められたことを決められたように教えなければならないという脅迫観念のようなものが日本語教育の中で潜在意識のかのように据え続けていたともいえるだろう。

しかし、たとえ日本語教育が60年代から80年代を経て、学習者主体を中心理念とし「なぜ」を問う「言語文化教育」へ関心がシフトしつつある傾向が強くなっても、この「何を」という教育内容について意識は依然としたまま根強いのが現実の日本語教育に強く影響を与え続けていると考えられる。

## 2. 2 日本語文法教育における「何を」

では、まず戦後日本語教育において文法は如何なる特徴をもって日本語教育の中で扱われてきたのかを考察する。

「日本語教育文法」と言えるものをはっきり確立したのは、寺村秀夫だと考えられる。*Basic Japanese*（大阪外国語大学、1967）というや*International Japanese*（大阪外国語大学、1968）という、よくも悪くも文法中心の教材の作成に関わり、その文法を寺村秀夫（1982、1984、1991）で定着させたからである。

この記述に対して、野田（2005）は、寺村文法は「日本語学」の分野で、現在日本語の記述的な文法を大きく発展させ、特に寺村文法で注目すべきことは、体系的にまとめにくい「機能」より、体系的にまとめやすい「形式」を中心に記述するなどの工夫が行われていることだと解釈している。さらに、野村（2005）はこのような形式中心としての文法の批判として、日本語教育現場に及ぶ体系主義・体系主義の悪影響は非常に大きいと述べている<sup>1</sup>。また、戦後80年代に入ってから、記述的に整えられており、80年代日本語教育の「効率性」「円満性」「到達性」（細川2006：126）の三つの教育理念の元で文型・文法・語彙などの言語的要素は「標準化」することになる。この時期は、上述した寺村秀夫が文法体系を整えた時期であるし、そのような傾向にしたがって国際交流基金の「日本語能力試験」本格的に実施されてきた時期でもある。また、このような文法、あるいは文型についての意識は従来の日本語教育の中、非常に根強い体系、「何を」を持つことになっているのではないかと考えられる。

### 2.3 日本文化教育における「何を」

母語ではない外国語を学習する際において、文法・文型・語彙といった言語的な側面のみならず、欠かせない学習といえ国「文化」という要素なのである。しかし、この「文化」をどのように規定するのには実に様々なのであるが、代表的に取り上げられるのは、専門分野・日本（人）論・日本人の行動様式・日本人の思考方法・日常生活情報・文化論などがある。このような文化という側面を有する概念を括れば、「集団文化」ということばに置き換えることができるのだろう。いわゆる、「日本人は〇〇だ」といったことがそれに当たるのである。ネウストフニー（1982, 1995）はこのような集団行動や認識などをコミュニケーションルールとし、それを教室の中で取り入れることがコミュニケーション能力向上のための方法だと主張する。その例として、名倉（2005）はそのコミュニケーションルールに焦点を当てながら、日韓挨拶表現に対するギャップを考察し、それを実際の日本語教育現場で活かすべき立場に立つ。つまり、一人の学者の目から見た文化論（細川2002）が言語教育の教育項目として取り上げられる場面は数多く存在する。無論、専門分野や日常生活情報でも状況は変わらない。

---

<sup>1</sup> 体系主義・形式主義の詳しい内容は紙面の都合上記述できないが、その具体的な内容は野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語文法』に詳しい

このように、文化は文法と比べれば「何を」は形としてまったく違うものということはいうまでもない。しかしながら、両方教えるべき項目が定められており、決められたように教えることにはそれほど違いはないのではないかと筆者は考える。

### 3 体系はいかなるものか

以上のことから、言語と文化は「体系」があるものとして捉えてきたことが分かる。つまり、言語と文化を固定的なものと捉え、それを学習者に知識・情報として提供してきたことでもあり、言語と文化を切り離して考えてきた傾向が非常に強かったとも言えるのである。現在、日本語教育において、コミュニケーション活動能力の育成が不可欠の課題であることは自明であろう。しかしながら、日本語教育に携わる人によって立場は違うかもしれないが、上述したように、言語と文化を知識・情報、つまり所与のものとして教室内で扱われてきたことは否定できない事実であろう。いわゆる、言語と文化は固定的、均質のものとして教室内で扱われてきたともいえるのであろう。しかし、人間のコミュニケーション活動は従来までの言語と文化の概念とは大きなズレがあると考えられる。

我々は生まれて、様々な環境に取り囲まれる。たとえば、自分を生んでくれた親が作った家族という集団がもうすでに存在するし、その家族の一員に属することになる。それと同時に、町、市・・結局は地球号という宇宙船の乗務員の一員にもなるだろう。そのような様々環境の中では、教え切れないくらいの場面が存在し、何かが常に起きる。そして、私たちはそれを言語という手段を通じて環境（文化）を自ら認識する。中野（1980：224）は、その環境は人々が自らの意識の中で形成する主観的な環境であると規定している。ここでの認識、意識というのは他者とは違う自分自身ならではの固有のものであり、この認識の作業というのは人間の営みの中でごく当たり前のことであると筆者は考える。さもなければ、我々人間単一化してしまい、自ら考えることができない単なるロボットに過ぎないからである。日本語教育においては、上述したように「何を」というものを固定化したもの、体系として捉え、それを学習者に体系をとって押し付けたことに問題があるだろう。

このように筆者が挙げた人間の営み、コミュニケーション活動というのは、自分の言葉というツールを持ち、外側に存在する文化を認識する力を養っていく活動と定義できるのではないだろうか。

## 4 結論（体系への認識）

本稿では日本語教育における「何を」という「体系」はいかなるものなのかを説明するために日本語文法、日本文化教育の中から考察を行った。しかし、上述するように、従来までの日本語教育では、言語と文化はそれぞれ体系があると暗黙に認識されてきた。このような、日本語教育における体系認識は言語と文化は切り離し、実際のコミュニケーション能力を重視することとはかなりのズレを見せてきたと考えられる。が、本当に言語と文化には体系が存在しないのだろうか。日本語文法においては、現在まで様々な立場で文法記述が行われているが、それを反映する日本語教科書の中はそんなに大きな違いはないといえる。また、日本文化においてはどうか。たびたび、教室内で扱われるものとして、「日本は〇〇だ」という文脈が登場する。日本人が全部そうであるという証拠はどこにもないが、統計的な「傾向」してはたしかに存在するかもしれない。ここから考えれば、言語も文化もある程度体系が存在するかのように考えられる。

しかし、ある言語、文化事実が存在するとしても、結局、それをいかに認識するのは他のだれでもない言語を用いて、文化を認識するコミュニケーション主体、自分自身なのである。なぜならば、同じ言語体系、文化体系を学習したとしても、それをどのように自分が置かれている場面の中で運用するかという諸問題は人間一人ひとり異なるからである。

とはいえ、筆者は言語と文化における体系を否定する立場はとらない。ただ、従来の日本語教育の大きな問題として体系を知識・情報として所与できるものとして捉えてきたことが挙げられる。このような教室空間での現象に伴う問題として、細川（2000）は、今まで知らなかった情報つまり知識を得るという方向へ進むと、それは学習者が何かについて考えるというよりも、知らないことを知ることで満足してしまう傾向が強まるとし、さらに、現実とは異なる、既成の先入観を植え付けられる恐れがあると指摘している。いわゆる、固定観念、偏見、ステレオタイプのような人間のコミュニケーションを妨げる要因とのつながりも想定できる。

では、このような現状の中で、教室内で学習者に育成することは何か。それは、上述したように、学習者一人ひとりが自分にとって体系どのようなもので、いかなるものなのかについて自律的に思考できる、その考える力なのであろう。

## 5 おわりに

日本語、日本文化における「体系」は「体系」という言葉を使わなくても、「傾向」として、必ず存在するものである。それはこの世に生きている人間一人ひとりに全部当てはまるものではない、ごく当たり前のような事実は認められていながらも、なぜ、教室では、学習者側に植えつける傾向が従来まで強かったのだろうか。本稿では体系に対する従来までの認識や現状、それについて筆者が考える方向を簡単に示したものの、肝心なこの体系意識をもたらした、原因には目が向いていなかった。よって、様々な理論や実践報告を踏まえて、その「体系意識」の枠組みの原因を具体的に検証することを今後の考察課題としたい。

### 文献

- 中野収 (1980) . 『現代人の情報行動』 日本放送出版会
- ネウストフニー, J. V. (1982) . 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- ネウストフニー, J. V. (1995) . 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 細川英雄 (1999) . 『日本語教育と日本事情——異文化を超える』 明石書店
- 細川英雄 (2002) . 『日本語教育は何をめざすか——言語文化活動の理論と実践』  
明石書店
- 細川英雄 (2002) . 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社
- 野田尚史 (編) (2005) . 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版
- 名倉康司 (2005) . 日本語教育におけるコミュニケーションルールの教え方——日韓挨拶表
- 現のギャップに関する考察に基づいて『愛知産業大学日本語教育研究所紀要』 12, 117-118
- 宮崎里司・川上郁雄・細川英雄 (2006) . 『新時代の日本語教育をめざして』 明治書院 pp.125-129
- 大石裕 (2006) . 『コミュニケーション研究——社会の中でのメディア』 慶応義塾大学出版